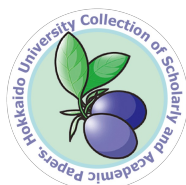




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日独イディオム比較・対照 : 「鼻」と "Nase" を構成要素とするイディオム表現
Author(s)	植田, 康成; Ueda, Yasunari
Citation	独語独文学研究年報, 31, 298-313
Issue Date	2004-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/26177
Type	departmental bulletin paper
File Information	31_P298-313.pdf



日独イディオム比較・対照 －「鼻」と"Nase"を構成要素とするイディオム表現－

植田康成（広島大学大学院文学研究科言語文化学講座）

"Jetzt habe ich aber die Nase voll", meckert Opa, als er nach einem ausgiebigen Kneipenbesuch in der Nacht die sechste Straßenlaterne gerammt hat, "ich setze mich jetzt einfach hin und warte ab, bis dieser dämliche Fackelzug vorbei ist!"

（Müller-Scherz (Hrs.) 1997: 157）（しこたま梯子酒をしての帰り道、街灯をすでに6つも壊した後のこと、「もううんざりだ」と年配の男は文句を言った。「こうなったら、ここにすわって、このたいまつ行列が過ぎ去るまで待つしかない！」）

0 はじめに

朝日新聞インターネット版からアクセス可能な『大辞林』で「鼻」を調べると、第四番目の項目として「書名」というのがあがっている。おそらくそれは芥川龍之介の短編『鼻』を指しているのであろう。それほどまでに、多くの日本人にとって、「鼻」といえば芥川龍之介の作品という連想が働いていることを証するものといえよう。西洋文学に詳しい向きは、エドモンド・ロスタン『シラノ・ド・ベルジュラック』や、ゴーリキの短編『鼻』を思い出すであろう。イタリアの児童文学として名高い『ピノキオ』においても、物語そのものは「ピノキオの冒険」となっているが、鼻が重要な役割を果たしている¹⁾。

いずれの文学作品においても、「鼻」が顔の中央に位置しており、人間のアイデンティティを象徴しているという認識が背景にあると思われる。実際に『大辞林』では、「(2) 男が、自分自身をさしている語」という語義説明がなされている。ただし、そういう仕草は、日本においてだけのものであるのかもしれない。少なくともドイツ語圏では、自分自身を指すときには、人差し指で「鼻」を指すことはしない。おおくは胸の左に位置している心臓を指さす。

「鼻」そのものについて、もう少しコメントするなら、人間の情報収集能力に関しては、嗅覚が一番劣っている。しかし、鼻が顔の中央に位置しているということで、人々の関心は、その鼻が有している嗅覚能力よりも形状に注がれてきたといえる。『大辞林』で「後方一致検索」で調べると、鼻の形態については、次のような11の語がある。「赤鼻」（色の赤い鼻）、「胡座鼻」（あぐらをかいたように低くて横に広い鼻）、「怒り鼻」（小鼻が横にひろがっている鼻）、「鉤鼻」（鼻柱が鍵のように鋭くとがり曲がっている鼻。わしばな）、「虹梁鼻」（上方に反っている鼻）、「石榴鼻」（鼻の頭が赤くふくれ、ぶつぶつしてザクロの実のように見えるもの）、「獅子っ鼻（獅子鼻）」（（獅子頭（1）の花に似て）低く小鼻のひろがった鼻）、「団子鼻」（先が団子のように丸い鼻）、「段鼻」（（蓮のように、）穴

が上に向いた低い鼻)、「鳶鼻(鷺鼻)」(鷺のくちばしのように先が鋭く下に曲がった鼻)、「蓮切り鼻」(蓮のように、穴が上に向いた低い鼻)である。「赤鼻」と「石榴鼻」、「鉤鼻」と「鳶鼻(鷺鼻)」、「段鼻」と「蓮切り鼻」、「怒り鼻」と「獅子っ鼻」は、形状としては同じであるので、最終的には、7つの形状が区別されているといえる。

他方、ドイツ語ではどうか。Mater の逆引き辞典 (Mater 1970) で調べてみよう。全部で 26 の語があがっているが、鼻の形状に関する語は 13 である。表現としては異なっているが、同じ形状の鼻を意味するものがあるので、鼻の形状そのものについては、7 つが区別されているようである。すなわち "Stumpfnase" (団子鼻)、「Sattelnase」(鼻骨が陥没している鞍鼻)、「Hakennase」、「Habichtsnase」、「Geiernase」、「Adlernase」(いずれも、鷺鼻)、「Stulpnase」、「Stülpnase」(いずれも、外側に反ったしゃくれた鼻)、「Schnapsnase」(酒飲み赤鼻)、「Stubsnose」、「Stupsnase」、「Himmelfahrtsnase」(いずれも、短くて上を向いた鼻)、「Breitnase」、「Plattnase」(いずれも、扁平鼻、平たい鼻)の 7 つである。鼻の形状については、日独両言語において、同じく 7 つが区別されている。しかしながら、「天狗鼻」が代表例と考えら得るが、その多くは日本人の「鼻」そのものについての区別なのかどうか、疑問がなきにしもあらずである。西洋と接する中で日本語に流入してきた語彙ではないか、という疑いはぬぐいきれない。

本論文では、日独両言語における「鼻」と"Nase"を構成要素とするイディオム表現²⁾を比較・対照する。それぞれの言語において「鼻」と"Nase"がどれだけイディオムの世界に反映されているのかをみてみたい。そして、そこから、ドイツ語イディオム学習に関する示唆が得られるならば、本論考の目的は達成されたといえよう。

1 データについて

日本語については『成語林』(尾上(編)1992)から収集した。そして補いとして『三省堂実用 慣用句の辞典』と『実用 ことわざ慣用句辞典』からも収集した。後者の辞典には、「鼻」を構成要素とするイディオム表現が 31 あがっている。この辞典に収録されていて、『成語林』に収録されていないものは、「鼻歌まじり」「鼻がつかえる」「鼻声を出す」「鼻っ柱を折る」「鼻をきかす」の 5 つである。これらの意味の説明は、他の辞典(『学研国語大辞典』(CD-ROM))によっている。『成語林』に収録されているものと重なっているものを省いて、両者を併せたものが【資料 1】としてあげた 75 である。

ドイツ語については、ドゥーデン『ドイツ語イディオム辞典』(DUDEN 1992)から収集した。筆者による日本語訳と一緒に【資料 2】としてあげた 45 の表現である。

2 データ分析の観点と分析

日独両言語におけるデータを、形態・統語、意味、語用の 3 つの観点から、分析する。

2.1 形態・統語論的観点からの分析

日独両言語のイディオム表現を、そのイディオム表現の主構成要素としての「鼻」と"Nase"の形態的なつくりの点で観察する。

2.1.1 日本語

日本語の「鼻」を構成要素とするイディオム表現の主要構成部分である「鼻」について、形態・統語的な観点から検討してみよう。

まず、目につくのは、「鼻」が単独でイディオム表現の構成要素となっているもの(41)と、「鼻」が複合的表現を形成してイディオムの構成要素となっているもの(34)が、ほぼ同じぐらい存在しているということである。

その複合的表現は、表面的には3種類を区別することができる。1つは「鼻脂」のタイプである。つまり、「鼻」ともう1つの名詞である「脂」が複合語を形成している。「鼻持ち」もこのタイプに含まれると考える。もう1つは「鼻っ端」のタイプである。他には「鼻っ柱」がある。3つ目は「鼻の差」のタイプである。つまり、「鼻+の+名詞」という型である。他には「鼻の下」「鼻の先」等がある。しかし、「鼻っ端」「鼻っ柱」は、「鼻の端」「鼻の柱」の音便形であるので、「鼻の差」と同じタイプと考えてもいいだろう。そうすると、2つのタイプしかないということになる。

意味的に考えると、どうなるか。「鼻脂」のタイプをさらに検討してみると、「鼻の脂」という具合に分解しても、意味に違いが生じないものと、「鼻歌」のように分解できないものがある。「鼻歌」は「鼻の歌」と同じ意味ではない。「鼻持ち」も「鼻の持ち」と同じではない。「鼻脂」が「鼻の脂」と同じ意味だとすると、「鼻の差」と同じタイプということになる。つまり、「鼻脂」「鼻の差」「鼻っ端」は、表面的には異なっているが、意味的には同じタイプということになる。従って、意味的に考えても、タイプは2通りということになる。

「鼻」以外に出現している名詞としては「目」「耳」「口」があるが、いずれも頭部、あるいは顔の部分ということになる。「猫の鼻」(65)以外は、すべて「人間の鼻」が意味されていると考えられる。表現の起源の点からいえば、「鼻の差」(30)は、競馬に由来しているようで、この場合の鼻は、馬の鼻ということになろう。

統語的には、後続する助詞によって分類することが可能である。主構成要素としての「鼻」および「鼻」との複合表現に後続する助詞には、1)「鼻息が荒い」のように「が」が後続するもの14、2)「鼻息を窺う」のように「を」が後続するもの31、3)「鼻糞で行灯張るよう」のように「で」が後続するもの5、5)「鼻くそも尊みながら」のように「も」が後続するもの2、6)「鼻先に身成る」のように「に」が後続するもの5、7)「鼻へ食うと長者になる」のように「へ」が後続するもの3、8)「でも」「をも」といった複合助詞がそれぞれ1つずつ、9)「は」を伴うものが1つある。最後に10)として、助詞を伴わないものがある(10)。(助詞を伴う場合も、伴わない場合もあると記されているものは、伴う場合として数えた。たとえば、「鼻歌まじり」「鼻の差」「得手に鼻突く」といったも

のである。「の」と「と」については、「口をして鼻の如くにす」(56)と「猫の鼻と女の尻は…」(65)は、どの部類にも帰属させがたいので、統語的な観点からの分類対象からはずすことにする。それ以外は、複合表現の連体修飾部分となっているものがすべてである。

「鼻息が荒い」にある「鼻息が」は、主語として機能している。また、「鼻息を窺う」にある「鼻息を」は、目的語となっている。「鼻くそで」「鼻先に」「鼻と」「鼻へ」は、いずれも副詞的表現である。つまり、統語的には、主語、目的語、副詞として機能している。

2.1.2 ドイツ語

ドイツ語については、どうか。主構成要素としての"Nase"についてみるならば、複合的表現を形成しているケースはない。イディオム表現中に共起している他の名詞としては、"Glas"、"Buch"、"Mund"、"Wind"、"Wort"、"Würmer"がある。最後の"Würmer"は"Wort"の言い換えであると考えることができる。

"Nase"が単独で出現しているものがほとんどであるが、その統語的機能はどうなっているのだろうか。ドゥーデンの配列は、まず主格（主語）(1)、4格（直接目的語）(2-14)、3格（間接目的語）(15)、前置詞の目的語となっているもの(16-39)、他の名詞とともに現れているもの(40-45)、という具合になっている。出現している前置詞には、"an"、"auf"、"in"、"mit"、"nach"、"pro"、"unter"、"vor"といったものがある。なお、"Nase"が他の名詞とともに前置詞をも伴っているものがある(41-45)が、それらの前置詞は、"in"、"um"、"aus"である。

2.1.3 意味論的観点からの分析

『学研国語大辞典』(CD-ROM)で「鼻」を調べると、基本的には3つの意味が区別されている。第1番目の意味は、「顔の中央にある突き出た部分。呼吸し、においをかぎ、また、発声をたすける」というものである。つまり、身体器官（嗅覚、呼吸器官）、顔の一部としての「鼻」、嗅覚そのもの、そして「鼻の差」という意味の競馬用語である。

また、朝日新聞インターネット版からアクセスできる『大辞林』によると、4つの項に分けて説明がなされているが、『学研国語大辞典』と共通しているのは、身体器官としての「鼻」だけである。あとの3つの項目は、異なっている。『大辞林』であげられている第2番目の意味は、「男が、自分自身をさしている語」となっているが、指示されている対象が「鼻」であり、「おれ、わたし」という意味で「鼻」という語が使われるわけではない。説明が舌足らずである。また、第3番目の説明として「鼻歌」の略とあるが、これは古い言葉遣いということであろう。第4番目には「書名」とあるが、「はじめに」でも触れたように、これは芥川龍之介の「鼻」をさしている。辞典によって、身体器官としての「鼻」の説明以外は、さまざまであるようである。「鼻も引っかけない」(40)の「鼻」は、身体器官としての「鼻」からの分泌物である。

他方、ドイツ語の"Nase"は、どのように説明されているのだろうか。ドゥーデン『ドイツ語汎用辞典』（CD-ROM）の"Nase"の項を検討してみよう。大きく 4 つの意味が区別されている。第 1 番目は、（人間や動物の）嗅覚器官としての「鼻」である。"jemandem passt/gefällt jemandes Nase nicht"（だれかにとってだれかの鼻は気に入らない）や"seine Nase in etwas/in alles [hinein]stecken"（あらゆることに鼻を突っ込む）というようなイディオム表現に出現している"Nase"は、身体器官あるいは嗅覚器官としての意味を持っている。より正確に言うならば、身体の一部で人間全体を言い表している換喩的表現である。"Nase"が「嗅覚能力」そのものを意味する場合がある。"der Hund hat eine gute Nase"（犬はいい「鼻」を持っている）という場合がそれである。さらに「感知能力」を意味する場合がある。"seine Nase hat ihn getäuscht"（「鼻」に欺かれた）がその例である。第 2 番目の意味は、比喩的に、物事の突端、先端というものである。"die Nase des Bootes hob sich aus den Wellen"（ボートの「鼻」が波から突き出した）というような場合である。第 3 番目は、"herablaufender Farb-, Lacktropfen"（垂れ落ちている塗料）などを意味する。第 4 番目は、ある種の鯉の名前である。"seine Nase in etwas stecken"（10）は、日本語で言えば「首を突っ込む」すなわち「自分に関わりのないことに関与する」という意味であるが、本来的には、動物、とりわけ犬や猫の振る舞いに由来する表現であるとも考えられる。

「鼻」および"Nase"を構成要素とする日独のイディオム表現を意味論的に分析するためには、以上のような辞典による「鼻」に関する語義説明を参考にしながら、実際のイディオム表現をひとつひとつ検討していくことになる。まず最初の観点として、身体器官、嗅覚器官としての「鼻」（a）、もう 1 つは、嗅覚能力そのものとしての「鼻」（b）、第 3 番目には、換喩的に人間の意味で使われている「鼻」（c）、第 4 番目は、「鼻」が高慢心という意味で使われている場合である（d）。「鼻」が比喩的に物事の先端、突端という意味を持つことは、辞典の意味記述にはあっても、実際のイディオム表現の例がないので、最終的には 4 つの観点ということになる³⁾。

以上の 4 つの意味論的観点から、分析した結果は、次の通りである。

意 味 論 的 観 点	日 本 語	ド イ ツ 語
(a)	52 (69.3%)	27 (60.0%)
(b)	3 (4.0%)	2 (4.4%)
(c)	16 (21.3%)	15 (33.3%)
(d)	4 (5.3%)	1 (2.2%)

（数値の合計が 100 % になっていないのは、小数点第 2 位で四捨五入したためである。次節の語用論的観点からの分析結果についても同様である。）

なお、補足すると、表現されている「鼻」に関わる仕草が、実際に可能か、どうか、という観点から、分類することも可能である。つまり、ブルガーのいう「真正のキネグラム」と「見かけのキネグラム」である (Burger 1976)。たとえば、「鼻を蠢かす」は、実際に小鼻をぴくぴく動かすことができる。また、「鼻をならす」こともできる。しかし、「鼻を高くする」といっても、これは精神的態度なのであり、実際に鼻を高くするには形成手術によらなければならない。「鼻が曲がる」といっても、実際に鼻が曲がるわけではない。それほど悪臭であるということである。イディオム表現となっている仕草の多くは、比喩的な表現であり、現実的には実行不可能なものである。

2.1.4 語用論的観点からの分析

語用論的には、当該のイディオム表現がポジティブ、あるいはネガティブな価値判断を伴って使われるか、あるいはそのいずれでもなくニュートラルであるのか、という点から観察することができる。たとえば、「鼻が高い」という表現は、多くの場合、「鼻が高い」として名指されている対象の人間をネガティブに評価している。逆に「目から鼻へ抜ける」という表現は、ポジティブな価値評価を伴って使われる。「鼻の差」はニュートラルな表現であろう。ドイツ語についても、"die Nase vorn haben" (8) は、ポジティブな価値評価を伴っているが、"die Nase hoch tragen" (9) は、ネガティブである。そして"der Nase vorn" (15) は、ニュートラルである。そのような3つの観点から、分析した結果は、次の通りである。

語 用 論 的 観 点	日 本 語	ド イ ツ 語
(+)	6 (8.0%)	7 (15.6%)
(-)	44 (58.7%)	24 (53.3%)
(±)	25 (33.3%)	14 (31.1%)

3 分析結果に基づく比較考察

形態・統語的にみて、日本語の方には「鼻」との複合語が多く存在するが、ドイツ語の方には全く存在しないということである。表現の由来の点で、動物の振る舞いに基づいていると考えられるものが、両言語において存在する。日本語の「鼻を鳴らす」とドイツ語の"seine Nase in etwas stecken" (関係ないことに首をつっこむ) である。また、「鼻の差」と"die Nase vorn haben"は、いずれも競馬に由来するものと考えられる。

日本語における「鼻」を構成要素とするイディオム表現とドイツ語における"Nase"を構成要素とするイディオム表現を比較・対照してみると、意味領域において重なっている部分がきわめて少ない。

たとえば、日本語においては、「鼻の下が干上がる」におけるように「鼻の下」が「口」を意味する場合もある。しかし、「鼻の下」と言えば、「鼻の下が長い」(34)、「鼻の下を長くする」(36)にあるように、「女性に甘い」という意味で理解されるのがふつうではないだろうか。ドイツ語ではそのような意味はない。ドイツ語で表現しようとする、非常に難しくなる。「鼻毛を数える」(16)をはじめとして、「鼻毛」が色事、女性に関係しているということは、ドイツ語を母語とするものにとっては、理解しがたいであろう。つまり、日本語においては「鼻」は、色恋沙汰に関係する場合が多いといえそうである⁴⁾。

他方、ドイツ語には"die Nase in ein Buch stecken"というような表現がある。書物との関わりを示すものといえようが、日本語には存在しない方向のイディオム表現である。

意味論的にみて、差がみられるのが、換喩的な用法である。ドイツ語においてはいくらか多い。また、高慢心、自尊心といった意味での用法が、日本語において約2倍ほどある。そして、身体器官としての「鼻」からの分泌物である「鼻」を意味する表現が、日本語においては2、ドイツ語においては1存在する。「鼻糞」は分泌物がほこりと一体となったものであり、これも分泌物に含めるならば、日本語においては7となる。圧倒的に分泌物としての「鼻」に重点を置いているといえよう。

語用論的にみて、大きな差があるのは、ポジティブな価値判断を伴って使われる表現が、ドイツ語の方が、日本語の約3倍近くあるということである。

4 ドイツ語イディオム学習の観点からの考察

4.1 言語理解の観点から

日本語においても同様な言い回しが存在するものは、理解がやさしい。たとえば、"eine Nase haben"(鼻を垂らしている)や"die Nase hoch tragen"(鼻が高い)である。また、"eine gute Nase haben"(嗅覚が優れている)、「die Nase vorn haben」(鼻の差)もそれほど理解において困難は生じないであろう。"vor jemandes Nase"(誰かの鼻の前で)は、日本語では「鼻先」ということになる。"seine Nase in alle Töpfe stecken"は、日本語に対応する表現は存在しないようであるが、イメージとしては理解しやすい。台所でつまみ食いをして、1つ1つ鍋のふたを開けている様子が思い浮かぶ。

"die Nase über jemanden rümpfen"(誰かについて鼻に皺をよせる)は、日本語では「鼻つまみ者」ということになるだろうか。"jemandem etwas an der Nase[enspitze] ansehen"は、日本語の「鼻息を窺う」に対応しているが、日本語では「鼻」ではなく「鼻息」ということに注意すべきである。同じ意味の言い回しに「顔色を窺う」がある。"seine Nase in etwas stecken"は、ドイツ語では「鼻」であるが、日本語では「首を突っ込む」あるいは「手出しする」「口出しする」といったように、「鼻」ではなく他の身体部位が関与することになる。ドイツ語では"der Nase nach"(鼻の向く方)というが、日本語では「足の向くまま」「風の吹くまま」ということになるだろう。

"sich an die eigene Nase fassen" (自分自身の鼻をつかむ) というのは、日本語は「まず
醜より始めよ」あるいはソクラテス風に「汝自身を知れ」ということである⁵⁾。ドイツ語
では"sich die Nase begießen" (鼻に注ぐ) というが、何を注ぐかという、アルコールで
ある。日本語では「喉を湿す」ということになる。"pro Nase"は、日本語では「一人あ
たり」ということになるが、「鼻」で人間を意味するというのは、『大辞林』の意味記述
では自分自身を指す語ということになっていても、理解しにくい。まだ、「頭数」という
表現の方がずっとわかりやすい。日本語では「目の前で電車が出て行った」というように
言うが、ドイツ語では"vor der Nase wegfahren" (鼻の前で出て行く) である。"von
jemandem/etwas die Nase voll haben"は、日本語では「鼻に付く」ということになる。"auf der
Nase liegen" (病気で寝込んでいる) は、日本人には少し理解しにくい発想である気がす
る。日本語では「すっかり寝込む」というような表現しか思いつかない。

"jemanden an der Nase herumführen"は、日本語では「誰かの鼻面を引き回す」といった
言い方に対応しているといえるが、厳密に言うと、日本語ではプロセスを問題にしており、
ドイツ語の方では、「欺く」という結果に重点を置いている⁶⁾。その意味では、「偽の友達」
であるといえよう。

4.2 言語産出の観点から

「鼻が利く」(eine gute Nase haben)、「鼻が高い」(die Nase hoch tragen あるいは hochnäsigt)、
「鼻の差」(die Nase vorn haben)、「鼻の先」(vor jemandes Nase) といった表現は、ドイ
ツ語においても類似的な表現があるので、産出においてそれほど困難は生じないだろう。

「鼻の先」は、ドイツ語では"kurzsichtig"ということになり、意味そのものをズバリ表
現することになる。また、おそらくは中国語から移植された言い回しであろうが、とても
あり得ないということを「耳取って鼻かむ」(70) というわけであるが、ドイツ語ではと
てもそのような発想はできないようである。"absolut unmöglich"といった表現しか思いつ
かない。

「鼻歌まじり」⁶⁾は、物事をいとも簡単にやってのけるというような意味であるので、"mit
links machen"ということになる。「朝飯前」も同様である。「鼻歌」そのものは、ハミング
のことであり、ドイツ語では"summen"という動詞がある。

「鼻つまみ者」、「鼻持ちならない」という日本語の表現を文字通りにドイツ語で表現
しようと思うと、非常に難しい。しかし、ドイツ語では難しく考えることはない。単に"das
Ekel"、"stinken"で十分なのである。同様に、文字通りに表現しようとする、くぐくぐし
い説明をしなければならないが、「鼻毛を数える」、「鼻毛を伸ばす」といった言い回しも、
イディオム表現としての意味をとって、"schmeicheln" (とりこむ)、"Schwäche haben" (弱
みを持つ) というようなことになるのか。

5 おわりに

最後に、"Nase"を構成要素とするイディオム表現を含むウィットを掲げて、本論文を終えることにしたい。

Der kleine Robert ist krank. "Wenn nachher der Doktor kommt", erklärt die Mutter, "dann streckst du ihm schön deine Zunge heraus!" "Und darf ich ihm auch eine lange Nase machen?"⁵¹", will Robert wissen. (Witzebuch 1997: 167) (ローベルトが病気になった。)"お医者さんが来たら、ちゃんと舌を突き出すのよ!、とお母さん。ローベルトが聞き返す「長い鼻をしてからからってもいいの?」)

6 注釈

1) イディオム表現の言語的特徴は、「固定性」(Stabilität)、「イディオム性」(Idiomatizität)、「語彙性」(Lexikalisiertheit)、「再生産性」(Reproduzierbarkeit)、「イメージ性」(Bildhaftigkeit)の5つに集約できる。詳細については植田 2003a、第2章、10-17頁を見られたい。またシュタインドゥルの論文(Steindl 2003)は、中国語のイディオム表現"Tuo ku-zi fang-pi"(脱褲子放屁)を論の出発点として、イディオム性、固定性、複合性(Polylexikalität)について、具体例に則してわかりやすく論述している。

2) 『ピノキオの冒険』のドイツ語訳(Carlo Collodi, Pinocchio. Zürich: Diogenes, 2000 (die erste Auflage 1978), 228 S., von Helga Legers ins Deutsche übersetzt)を読んだ限りで、以下のようなことを考えた。

ドイツ語訳にはイディオム表現が多用されているということである。イタリア語訳ではどうなっているのだろうか。そして、日本語訳、さらに英語訳ではどうなっているのだろうか。これらの4つの言語の版をイディオム表現に関して比較・対照してみることは、非常におもしろいだろう。

そして、この物語自身が、おそらくイディオム表現を元にして構想されているという解釈も可能といえよう。愚鈍な人間を非難する言葉として、"Esel"(ロバ)という語が使われるが、怠惰なピノキオと悪友の「トウシン小僧」(ドイツ語: Kerzendocht, イタリア語: Lucignolo)が、ふたりとも、ロバになってしまうというのも、そのような言葉の使用がもとになっているといえよう。そのような考えを支持する箇所がある。鼻に関するイディオム表現、そしてピノキオが嘘つきであるということに関連するイディオム表現が、そこでは使われている。

Die Fee aber schaute ihn an und lachte.

"Warum lachst du?", fragte der hölzerne Bube, ganz verwirrt und besorgt über seine Nase, die zusehends wuchs.

"Ich lache über deine Lüge."

"Wieso aber weißt du, dass es eine Lüge war?"

"Die Lügen, meine Junge, erkennt man sofort, es gibt nämlich zwei Arten: Es gibt Lügen, die haben kurze Beine, und solche, die haben lange Nasen. Die deinen gehören zu denen, die eine lange Nase haben." (上述、ドイツ語訳 86 頁)

短い足を持った嘘、長い鼻を持った嘘、いずれも、すぐばれる嘘、ということである。このようなイディオム表現をふまえて、鼻の長い嘘つきのピノキオの物語が構想されたとも考えられる。あるいはドイツ語の"eine lange Nase haben"に対応するイタリア語のイディオム表現そのものがピノキオの物語に由来しているのかも知れない。

3) 分類項目は、もっと細分化可能であろうが、本論考では、とりあえず4つの項目を設定する。辞典の意味記述には見られないが、身体器官としての「鼻」からの分泌物である「鼻」は(a)に含める。また、(b)には、臭覚能力以外に、情報収集能力、感知能力といったものも含まれる。「鼻」が換喩的に人間を意味する典型例は"pro Nase" (30) という表現であるが、

「鼻」が「顔」、「人格、精神」、「関心」を意味する場合も含め、換喩的用法全般を(c)とする。

4) 「はじめに」で言及したように、『シラノ・ド・ベルジュラック』が存在するフランス語の世界では、この点、どうなっているのだろうか。興味深いところである。

5) "sich an der eigenen Nase fassen"と"jemanden an der Nase herumführen"に関して、下のカリチュアを参照(前者については Röhrich (1991/92: 1083) から、後者については Badische Zeitung (22. Februar 1980) から。また、下の3コマ漫画は Badische Zeitung (15. November 2000) からのものである。"Beelzebub"とは悪魔の大将である。あの世にいて悪魔の大将に出会った男が、愛想よく挨拶して、だまくらかしたというふうに、鼻の上に広げた左手の親指を立てている。これが"jemandem eine lange Nase machen"というしぐさである。

6) 2003 年度後期の授業「対照言語学特別演習」で、【資料1】のイディオム表現に関して、語用論的な観点からのアンケートを行った。回収した10のアンケートを分析してみたところ、筆者と判断が異なるものがいくつかあった。「鼻歌まじり」については、「はなうたまじり[気分のいい様子、どっちかというところ、真剣味の足りない様子]で仕事をする」(『新明解国語辞典』1136頁)ということであるが、後半のネガティブな意味合いは看取されていず、ポジティブな表現であるという結果であった。筆者と30歳ほどへだつた若い世代においては、意味が変化しているイディオム表現もあるということであろう。

7 参考文献

Burger 1976: Harald Burger, Die Achseln zucken - Zur sprachlichen Kodierung nicht-sprachlicher Kommunikation. In: Wirkendes Wort, 22, S.311-334

『独和大辞典』、小学館(コンパクト版)

DUDEN 1992: DUDEN 11 Redewendungen und sprichwörtliche Redensarten. Idiomaticsches Wörterbuch der deutschen Sprache. Bearbeitet von Günther Drosdowski und Werner Scholze-Stubenrecht. Mannheim/Leipzig/Wien/Zürich: Dudenverlag.

Friederich 1966: Wolf Friederich, Moderne Deutsche Idiomatik. Systematisches Wörterbuch mit Definitionen und Beispielen. München: Max Hueber.

『学研国語辞典』(CD-ROM版)

『三省堂実用 慣用句の辞典』(倉持保男・阪田雪子[編])、三省堂。

『実用 ことわざ慣用句辞典』(三省堂編修所[編])、三省堂。

Mater 1970: Erich Mater, Rückläufiges Wörterbuch der deutschen Gegenwartssprache. Leipzig: VEB Enzyklopädie.

Müller-Scherz (Hrsg.) 1997: H. Müller-Scherz (Hrsg.), 800 tolle Kinderwitze. Ravensburg: Ravensburger Buchverlag. (Ravensburger Taschenbuch 3044)

『日本語大辞典』、講談社。

尾上(編)1992: 尾上兼英(編)『成語林』、旺文社。

『新明解国語辞典』(第五版)、三省堂。

Steindl 2003: Michale Steindl, Tuo ku-zi fang-pi und andere Redensarten. In: Der Sprachdienst, 5/03, S. 166-172,

Röhrich 1991/92: Das große Lexikon der sprichwörtlichen Redensarten. 1-3. Freiburg/Basel/Wien: Herder Verlag.

Witzbuch 1997: Witzbuch. über 1000 Witze für junge Leute. Remseck bei Stuttgart: Fischer Verlag.

8 資料

【資料1】日本語における「鼻」を構成要素とするイディオム表現

1. 鼻脂（を）引く：表面がなめらかになるように鼻脂を塗る。転じて、最後の仕上げをする。
また、なめらかに仕上がるためのまじないとして、鼻のあぶらをつける。（a）（+）
2. 鼻息が荒い：意気込みが激しい。自信が強く、他人の言うことなどは受け付けけない。（c）（-）
3. 鼻息を窺う：恐る恐る相手の機嫌・意向をうかがう。（顔色を窺う）（c）（-）
4. 鼻歌まじり：気楽なさま（『日本語大辞典』1577頁）。（c）（+）
5. 鼻が胡座を掻く：鼻が低く横に広がり、鼻の穴が上向きであるために、顔の真ん中であたかも鼻があぐらをかいて座っているかのような顔のたとえ。（a）（-）
6. 鼻が利く：嗅覚が鋭い。転じて、かくしごとなどを鋭く感じとる。また、利益の得られそうなことに敏感である。（b）（+）
7. 鼻が高い：得意である。誇らしい。傲慢なようすだ。（d）（±）
8. 鼻が曲がる：（あまりに強烈な悪臭なので鼻が曲がってしまうくらいであるという意から）強い悪臭がするさまのたとえ。（a）（-）
9. 鼻がつかえる：前の方がつかえていて先に進めない様子。また、部屋などが非常に狭い様子（『実用 ことわざ慣用語辞典』606頁）。（a）（-）
10. 鼻葉を嗅がせる：ちょっとした賄賂を贈る。贈賄をする。（鼻葉を買う）（a）（-）
11. 鼻糞が目糞を笑う⇒目糞（が）鼻糞を笑う：（a）（-）
12. 鼻糞で行灯張るよう：（あんどんの紙のはがれたのを鼻くそではりつけておくの意から）いいかげんな仕事、ごまかしのやつつけ仕事であることのたとえ。（a）（-）
13. 鼻糞で鯛を釣る：つまらないものを元手にして、大きな利益を得るたとえ。（海老で鯛を釣る）（a）（+）
14. 鼻糞丸めて万金丹：薬のききめがないのをあざけることば。子供が鼻くそをほじくって丸めたりするときに口にするはやしことば。（a）（-）
15. 鼻糞も尊みがら：鼻くそのようにつまらないものでも、信仰する人には尊く見え、また、霊薬と信じられるということ。迷信の愚をあざけっている。（鯛の頭も信心から）（a）（-）
16. 鼻毛を数える：女性が自分に惚れている男性の心を見抜いて好きなようにもてあそぶ。相手の心を見抜いて、機嫌をとる。（鼻毛を読む）（a）（-）
17. 鼻毛を抜く：愚かな相手の心中を見すかして、だしぬく。だます。（a）（-）
18. 鼻毛を伸ばす：女性の色香に迷いおぼれて、うつつを抜かず。女性に対してだらしないほど甘くなる。（鼻毛を長くする）（a）（-）
19. 鼻毛を読む：女性が自分に惚れている男性の心中を見すかして、好きなようにもてあそんだりあやつたりする。（a）（-）
20. 鼻声を出す：鼻声（甘えたり、風邪を引いたりしたときなどの、鼻にかかった声（『日本語大辞典』1577頁）を出す。（a）（±）
21. 鼻先に身成る：人間の胎児はまず鼻から形ができて来るという俗説。これをふまえて、物事のはじまり、また最初に物事を始めた人のことを鼻祖というようになった。（a）（±）
22. 鼻っ端が強い：強情で人に譲ろうとしない。張りあう気持や物事に向かっていく気持が強い。（鼻っ柱が強い、鼻っ張りが強い）（c）（-）
23. 鼻っ柱を折る：鼻っ柱をへし折る：負けまいとして張り合う相手の、自信・傲慢な心を屈服させる（『日本語大辞典』1579頁）。（c）（-）
24. 鼻であしらう：ろくな対応もせず、見下した扱いをする。すげない態度をとる。（鼻の先であしらう）（a）（-）
25. 鼻で笑う：鼻先で、軽蔑した笑い方をする。（鼻の先で笑う）（a）（-）

26. 鼻と鼻を突き合わせる：たがいに接近して話す。(a) (±)
27. 鼻に掛かる：声が鼻の中に共鳴する。(a) (±)
28. 鼻に掛ける：得意げなようすでいばる。自慢する。(鼻へ掛ける) (a) (－)
29. 鼻に付く：不快なおいが鼻を刺激する。飽きていやになる。言動がいやみに感じられる。(c) (－)
30. 鼻の差：わずかの差。僅差。僅少差。(a) (±)
31. 鼻の先：すぐ目の前。近いところ。目先のことしか考えないこと。軽率な考え。(a) (－)
32. 鼻(の)先で笑う：相手をばかにしたようにせせら笑う。まともに相手にできないといったふうにする。(a) (－)
33. 鼻の下が可愛い：「鼻の下」は、口のこと] 食べていくことが何よりも先であるということ。(花の下より鼻の下、花より団子) (c) (±)
34. 鼻の下が長い：女性に対して甘い。好色である。(a) (－)
35. 鼻の下が干上がる：口に入れるものがないくらい生計が苦しい。食べるのにも困る。生活に困る。(c) (－)
36. 鼻の下を長くする：女性に甘いそぶりを見せる。女性の色香に迷う。(鼻毛を伸ばす) (a) (－)
37. 鼻柱を折る：相手の負けん気や過剰な自信をくじく。意地っ張りな態度、高慢な態度を打ち砕く。(鼻を折る) (c) (±)
38. 鼻へ食うと長者になる：明かりもつけずに、口と鼻とまちがえるほどの暗闇で食事をして儉約に努める人は、金をため財産家になるということ。(a) (±)
39. 鼻持ち(が)ならない：ことばづかいやふるまいなどが嫌味で、耐えきれない。(c) (－)
40. 鼻も引っかけない：軽蔑して、まったく相手にしない。(唾も引っ掛けない) (a) (－)
41. 鼻を明かす：得意になっている相手をだしぬいて、あつと言わせる。(鼻を明かさず、鼻を明かせる) (a) (±)
42. 鼻を蠢(うごめ)かす：得意なようすをする。(a) (－)
43. 鼻を打つ：鼻汁をすすする。強い臭気が鼻を刺激する。(a) (－)
44. 鼻を折る：相手のうぬぼれや慢心をくじく。得意がっている人に恥をかかせる。(d) (±)
45. 鼻を利かす：⇒鼻が利く：においを敏感に感じる意で、秘密などを敏感に感じとる様子(『実用 ことわざ慣用句辞典』606頁)。(b) (±)
46. 鼻を高くする：得意になる。面目を施す。名誉をあげる。(d) (±)
47. 鼻をつき合わせる：きわめて近い間柄で向き合う。(a) (±)
48. 鼻を突く：強いにおいが鼻を刺激する。相手と鼻がくつつくぐらいに、非常に近くに寄る。主君に勘当される。また、失敗する。しくじる。(a) (－)
49. 鼻を鳴らす：鼻から出るような声を出して甘えたりすねたりする。また、犬などがぐんぐんと鳴いて甘える。(a) (－)
50. 鼻息を仰ぐ：相手のきげんをうかがう。他人の意向を知ろうと、びくびくしているさまのたとえ。(c) (－)

語中に「鼻」を含む表現

51. 一日猿楽(さるがく)に鼻を欠く：わずかの楽しみのために大きな損をする。(c) (－)
52. 牛と芥子(からし)は願いから鼻を通す：自分自身望んで災いを受けることのたとえ。(牛は願いから鼻を通す) (a) (－)
53. 得手に鼻突く：自分が得意だと思っていることには気がゆるんで、かえって失敗することがあることのたとえ。(a) (－)
54. 女の知恵は鼻の先：女性の考えは目先のことだけにとらわれて、先の見通しがないということ。(女の利発牛の一散) (a) (－)
55. 木で鼻を括る：相談や頼み事を受けたときに、ひどく冷淡な態度であしらったり、無愛

- 想に應對したりする。(a)(-)
56. 口をして鼻の如くにする：余計なことを言わず、口を慎むようにする。そうすれば災難をまねくこともないという意。(a)(±)
57. 暗がりて鼻(を)摘む(よう)：まるっきり見当がつかないことのたとえ。(a)(±)
58. 苦しいときは鼻をも削ぐ：人間は差しせまったときには、手段を選ばずどんなことでもするというたとえ。(a)(±)
59. クレオパトラの鼻がもう少し低かったら、世界の歴史は変わっていたであろう。(a)(±)
60. 刻削の道は、鼻は大なるに如くは莫く、目は小なるに如くは莫し：事をなすにあたって、取り返しがつかぬことにならないように、注意と慎重さをもって行えば失敗は少ないというたとえ。(a)(±)
61. 彩ずる仏の鼻を欠く：念を入れすぎたために大事な部分をだめにしてしまうたとえ。(c)(-)
62. 西子も不潔を蒙らば即ち人皆鼻を掩いて過ぎん：善良だった人でも悪を身につけると人から嫌われるようになるというたとえ。(a)(-)
63. 時の用には鼻を欠け：さしせまった場合には手段をあこれ考えてはいられないというたとえ。(a)(±)
64. 名の木も鼻につく：ものには程度というものがあり、いくらよいものでも、限度を超えるとうんざりするというたとえ。(c)(-)
65. 猫の鼻と女の尻は大暑三日の外は冷たい：猫の鼻先は湿っていてほとんどいつも冷たく、女性の尻も皮下脂肪の厚いせいでほとんどいつも冷たいということ。(a)(-)
66. 花の下より鼻の下：花の下でその美しい花を見て目を楽しませるより、鼻の下にある口に食べさせることの方が先である。(花より団子)(c)(±)
67. 拍子木で鼻(を)かむ：ぶあいそうな対応をするたとえ。冷淡にあつかう。(a)(-)
68. 仏を直すとして鼻を欠く：小さな欠点を直そうとして、かえって全体をそこなうことのたとえ。(角を矯めて牛を殺す)(c)(-)
69. 慢心鼻を弾かる：あまり高慢になって鼻をうごめかしていると、とかくその鼻が弾かれたように面目を失うことが生じ、大恥をかく結果になりかねないということ。(d)(-)
70. 耳取って鼻かむ：とんでもないこと、とうてい考えられないことをするたとえ。(目を取って鼻へ押っ付ける)(a)(±)
71. 見る目嗅ぐ鼻：世間の人たちが、他人の行動をよく観察しているということ。なんでもよく見通す人のこと。男女の情に深く通じている人のたとえ。(b)(+)
72. 目から鼻へ抜ける：非常に賢くて物事の理解がすばやい、また、手抜かりのないさまのたとえ。(a)(+)
73. 目と鼻：ほんの少ししか離れていないこと、非常に近いことのたとえ。(目と鼻の間、目と鼻の先)(a)(±)
74. 目を取って鼻へ押っ付ける：思いもよらぬこと、乱暴なことをするたとえ。(a)(±)
75. 用のあるときには鼻でも削ぐ：せっぱ詰まれば手段を選んでいる余裕はない。(a)(±)

【資料2】ドイツ語における"Nase"を構成要素とするイディオム表現

1. jmdn. passt/gefällt jmds. Nase nicht (ugs.) : jmd. kann jmdn. nicht leiden (c)(-)
(だれかの鼻が気に入らない：だれかに我慢がならない)
2. die Nase zu tief ins Glas stecken: mehr Alkohol trinken, als man verträgt, sich betrinken (a)(±)
(グラスに鼻をつっこみすぎる：飲み過ぎて、酔っぱらう)
3. die Nase über jmdn., über etwas rümpfen: jmdn., etwas gering schätzen, auf jmdn., auf etwas verächtlich herabsehen (a)(-)
(だれかについて鼻にしわを寄せる：だれかを軽く見る、見下げる)

4. eine Nase haben (familiär) : Schleim aus der Nase hervortreten lassen (a) (－)
(鼻を持っている：鼻を垂らす)
5. die richtige Nase haben (ugs.) : etwas richtig voraussehen, ausfindig machen (b) (+)
(正しい鼻を持っている：何かを正しく予見する)
6. eine gute/feine Nase haben; eine [gute/feine] Nase für etwas haben (ugs.) : einen besonderen Spürsinn [für etwas] haben, etwas richtig einschätzen (b) (+)
(いい鼻を持っている：特別な感覚を持っている、正確に評価する)
7. [von jmdm., von etwas] die Nase [gestrichen] voll haben (ugs.) : jmds., einer Sache überdrüssig sein (c) (－) (何かにに関して鼻が満杯になる：ある事柄にうんざりする)
8. die Nase vorn haben (ugs.) : den Sieg, Erfolg davontragen (a) (+)
(鼻を先に持っている：勝利、成功をさらっていく)
9. die Nase hoch tragen: eingebildet sein (d) (－)
(鼻を高く持っている：高慢、思い上がっている)
10. seine Nase in etwas [hinein] stecken/über all hineinstecken (ugs.) : sich neugierig um etwas/um alles kümmern/was einen nichts angeht (c) (－)
(何かに鼻を突っ込んでいる：自分に関わりのないことに好奇心を抱いてかかわる)
11. seine/die Nase in ein Buch stecken (ugs.) : ein Buch lesen, aus einem Buch lernen (a) (±)
(本に鼻を突っ込んでいる：本を読んでいる)
12. sich die Nase begießen (ugs.) : reichlich Alkohol trinken (a) (－)
(鼻を潤す：十分にアルコールを飲む)
13. sich eine goldene Nase verdienen (ugs.) : sehr viel Geld verdienen (a) (+)
(金の鼻を得る：たくさんのお金を手に入れる)
14. jmdm. eine [lange] Nase drehen/machen (ugs.) : jmdn. verspotten, auslachen (a) (－)
(だれかに向かって「長い」鼻を回す：だれかを馬鹿にする、笑いものにする)
15. der Nase nach (ugs.) : geradeaus (a) (±)
(鼻に従って：まっすぐに)
16. sich an die eigene Nase fassen (ugs.) : sich um die eigenen Fehler und Schwächen kümmern (a) (±) (自分自身の鼻をつかむ：自分自身の過ち、弱点を取り除こうとする)
17. jmdn. an der Nase herumführen (ugs.) : jmdn. täuschen, irreführen (a) (－)
(だれかの鼻を捕まえて引きずり回す：だれかを欺く)
18. jmdm. etwas an der Nase[nspitze] ansehen (ugs.) : etwas an jmds. Miene ablesen (c) (±)
(だれかの鼻から読み取る：顔の表情から読み取る)
19. eins auf die Nase bekommen/kriegen (ugs.) : 1. Prügel bekommen. 2. zurechtgewiesen werden (a) (－) (鼻の上に1つもらう：ぶたれる、叱責される)
20. jmdm. eins auf die Nase geben (ugs.) : 1. jmdn. verprügeln. 2. jmdn. zurechtweisen (a) (－)
(だれかの鼻の上に1つ食らわす：だれかをぶつ、叱責する)
21. auf die Nase fallen (ugs.) : einen Misserfolg haben (a) (±)
(鼻の上に倒れる：失敗する)
22. auf der Nase/ (auch: Schnauze) liegen (ugs.) : krank sein (a) (－)
(鼻の上に横たわっている：病気をしている)
23. jmdm. etwas auf die Nase binden (ugs.) : jmdm. etwas erzählen [was nicht für ihn bestimmt ist] (c) (－)
(だれかの鼻の上に何かをくくりつける：関係ないことを話す)
24. jmdm. auf der Nase herumtanzen (ugs.) : mit jmdm. machen, was man will; jmds. Gutmütigkeit ausnutzen (c) (－) (だれかの鼻の上で踊る：好き放題にする)
25. jmdm. in die Nase stechen (ugs.) : jmdm. sehr gefallen, von jmdm. erstrebt, begehrt werden (c)

- (+) (だれかの鼻に刺さる：だれかの気に入る)
26. jmdn. mit der Nase auf etwas stoßen (ugs.) : jmdn. deutlich auf etwas hinweisen (a) (±)
(何かをある人の鼻に突きつける：何かをはっきりと示す)
27. immer mit der Nase vorneweg sein (ugs.) : vorwitzig sein (a) (+)
(常に鼻を持って先にある：機転が利く)
28. mit langer Nase abziehen müssen (ugs.) : das Nachsehen haben (a) (－)
(長い鼻を持って引き下がる：不利益を蒙る)
29. [nicht] nach jdms. Nase sein (ugs.) : jmdm. [nicht] gefallen (c) (±)
(だれかの鼻に沿っている：だれかの気に入る)
30. pro [Mann und] Nase (ugs.) : pro Person (c) (±) (鼻当たり：一人当たり)
31. sich etwas unter die Nase schieben/stecken (ugs.) : etwas in den Mund stecken, essen (a) (±)
(何かを鼻の下に押しつける：何かを口に入れる、食べる)
32. jmdm. etwas unter die Nase reiben (ugs.) : jmdm. wegen etwas Vorhaltungen machen; jmdm. etwas Unangenehmes [unverblüht] sagen (a) (－)
(だれかの鼻の下に何かをこすりつける：だれかに対して注意する、不愉快なことをいう)
33. jmdm. jmdn. vor die Nase setzen (ugs.) : jmdm. jmdn. überordnen, zum Vorgesetzten machen (c) (－)
(だれかの鼻の前にだれかを置く：だれかに対してだれかを上役として置く)
34. jmdn. vor die Nase gesetzt bekommen/kriegen (ugs.) : jmdn. zum Vorgesetzten bekommen (c) (－)
(鼻の前にだれかが置かれる：だれかが上役として置かれる)
35. vor jdms. Nase: in unmittelbarer Nähe vor jmdm. (a) (±) (だれかの鼻の前：すぐ近くに)
36. jmdm. etwas vor der Nase wegschnappen (ugs.) : etwas [schnell] an sich bringen, bevor es ein anderer erlangen kann (a) (±)
(だれかの鼻の前で何かを取り去る：だれかがとる前につかみ取ってしまう)
37. jmdm. vor der Nase wegfahren (ugs.) : abfahren, kurz bevor jmd. das Fahrzeug erreicht (a) (－)
(だれかの鼻の前で走り去る：乗る前に出発してしまう)
38. etwas vor der Nase haben (ugs.) : etwas in unmittelbarer Nähe haben (a) (±)
(何かを鼻の前にもつ：間近にもっている)
39. jmdm. etwas vor der Nase zuschlagen (ugs.) : etwas zuschlagen, während jmd. unmittelbar davor steht oder es gerade erreicht (a) (－)
(だれかの鼻の前で何かを閉める：だれかが立っているその前で閉める)
40. Mund und Nase aufreißen/aufsperrn (ugs.) : sehr überrascht sein (S. 495) (a) (±)
(口と鼻を大きく引き裂く：非常に驚く)
41. in alle Töpfe gucken; seine Nase in alle Töpfe stecken (ugs.) : sehr neugierig sein [und sich überall einmischen] (S. 728) (c) (－) (すべての鍋をのぞく：非常に好奇心が強い)
42. sich den/frischen Wind um die Nase/Ohren wehen/pfeifen lassen: die Welt und das Leben kennen lernen (S. 808) (a) (+) (新鮮な風を鼻の回りに吹かせる：世間を知る)
43. jmdm. jedes Wort [einzeln] aus der Nase ziehen müssen (ugs.) : nur mühsam und nach und nach Auskünfte, einen Bericht von jmdm. erhalten können (S. 815) (c) (－)
(だれかの鼻からことばを引き出さざるを得ない：少しずつしか情報を手に入れることができない)
44. sich jedes Wort [einzeln] aus der Nase ziehen lassen (ugs.) : nur sehr wortkarg und auf Drängen Auskunft geben, berichten (S. 815) (c) (－)
(鼻からことばを引き出させる：寡黙であるため、強いられて始めて、情報を与える)
45. jmdm. die Würmer [einzeln] aus der Nase ziehen (ugs.) : jmdm. etwas [mühsam] nach und nach durch Fragen entlocken (S. 820) (c) (－)
(だれかの鼻から虫を引き出す：質問を重ねて少しずつ知りたいことを手に入れる)

9 ドイツ語レジュメ

Kontrastive Phraseologie Deutsch-Japanisch

- idiomatische Wendungen mit der Hauptkomponente

"Nase" im Deutschen und "Hana" im Japanischen -

Das Ziel der vorliegenden Arbeit besteht darin, zunächst die idiomatischen Wendungen mit den Hauptkomponenten "Nase" im Deutschen und "Hana" (Nase) im Japanischen in Bezug auf die morpho-syntaktischen, semantischen und pragmatischen Eigenschaften kontrastiv zu analysieren. Dann werden aufgrund der Analyseergebnisse einige sprachdidaktische Überlegungen angestellt.

Als Daten für das Deutsche wurden insgesamt 45 Wendungen aus dem Lexikon "Duden Redewendungen und sprichwörtlichen Redensarten. Idiomatisches Wörterbuch der deutschen Sprache" (DUDEN 1992) und für das Japanische insgesamt 75 Wendungen aus einigen Idiom-Lexika, hauptsächlich aus "Seigori" (Ogami 1992) gesammelt.

Semantisch werden die Wendungen in den beiden Sprachen aus folgenden vier Gesichtspunkten betrachtet: (a) Nase als "Körperteil", (b) Nase als "Geruchssinn", (c) Nase als "Mensch" und (d) Nase als Hochmut oder Eitelkeit. Die Nase und "Hana" haben zwar den lexikalischen Eintrag "Spitze von Dingen", aber es gibt keine Wendungen mit "Nase" oder "Hana" in dieser Bedeutung. Pragmatisch werden die Wendungen in Bezug auf ihre positive oder negative Konnotation geprüft.

Beim Vergleich fällt auf, dass es im Deutschen keine Wendungen mit den Komposita mit Nase gibt, während es im Japanischen viele Wendungen mit den Nasenkomposita gibt. In den beiden Sprachen gibt es Wendungen, die von der Verhaltensweise von Tieren herrühren ("seine Nase in etwas stecken", "die Nase vorn haben" im Deutschen, "Hana wo narasu" (die Nase blasen), "Hana no sa" (Nasenabstand) im Japanischen. Bemerkenswert ist die Tatsache, dass es im Japanischen einige Wendungen mit den Nasenkomposita gibt, die auf die erotischen Beziehungen zwischen Mann und Frau anspielen, die den Deutschmuttersprachlern schwer nachvollziehbar sind: z.B. "Hanage wo kazoeru" (wörtlich "Nasenhaare zählen": schmeicheln, leicht kontrollieren), "Hana no shita wo nagaku-suru" (wörtlich "den Unteren der Nase länger machen": Schwäche haben). Für einige japanische Wendungen gibt es keine idiomatischen Entsprechungen im Deutschen, sondern einfache Ausdrücke: z. B. "Hana tumami mono" vs. "das Ekel" oder "stinken". Die Wendungen "jemanden an der Nase herumführen" im Deutschen und "Hanazura wo hikimawasu" im Japanischen sind wohl als "Falsche Freunde" zu nennen; es gibt zwischen den beiden Wendungen einen Aspektunterschied.